

なことはしないと言ひ張り、顔にビンタを一つも  
らって一週間の絶食が言ひ渡された。薬などない  
ので絶食しかなかったのだろうが絶食はつらかつ  
た。無事に治ってまたノルマに挑戦した。その後  
私はノルマを一三〇%上げてソ連から表彰される  
ことになった、似顔絵が収容所に張り出された。  
それを見た軍医が、済まなかった、おまえはうそ  
を言うような人間ではなかった、俺もおまえも新  
潟県人だ、頑張れと手を握られたときの嬉しさは  
今も忘れられない。

道床がある程度できたころ鉄道の敷設隊が編成  
されてその一員となった。鉄道の先端まで貨車で  
レールが運ばれ、道床にローラーを置き、その上  
を滑らせてレールを配る者、レールをジョイント  
する者、槌で犬くぎを打ち込んで固定する者等  
で、三年間いるうちに二百六十キロまで鉄道が延  
びた。よかったことは三百五十グラムのパンが敷  
設隊に入ってから四百グラムに増えたことだっ  
た。駅となる場所や引込線の場所などにポイント

入れも覚えてエンジニアと呼ばれた。復員後、鉾  
山で働くときレール敷設やポイント入れは大いに  
役立った。

昭和二十三年五月、二回目の表彰を受け、一週  
間の休暇をもらって憩いの家に入った。三日目の  
朝、ソ連の監督が東京ダモイだ、早く早くせき立  
てられて、半信半疑で、自分の敷いた線路の上を  
日本に帰る港に向けて揺られていることは誠に感  
無量であった。昭和二十三年六月二十三日懐かし  
の我が家に帰ることができた。

## 抑留中の労苦記録

岐阜県 荒川 良三

一、出生から入隊まで

出生地 岐阜県吉城郡古川町信包

生年月日 昭和五(一九三〇)年五月七日

学校 信包小学校高等科卒業

## 二、ソ連軍侵攻前

入隊 昭和二十年四月

入隊場所 満州国牡丹江省東寧街にて

駐屯地 東寧報国農場

## 三、ソ連軍侵攻

いつ 昭和二十年八月十二日

どこで 「ソ連戦車隊」に道程付近で

どんな状況で 着の身着のまままで

## 四、終戦

詔勅 知らなかった

感想 すぐ日本に帰れると思った

どう終戦したか 昭和二十年八月二十日ころ牡丹江で（武装解除）

武装解除から収容所入りまで 八月二十日ころ、掖河の陸軍病院跡に収容された

五、シベリア抑留地への移送

いつ頃 昭和二十一年四月上旬

どこの地点からどこへ送られた 掖河駅から貨物列車でルチキへ

第一次入ソ場所 ルチキのソフホーズ

## 六、抑留地の生活

○第一次収容所 ルチキのソフホーズ、昭和二十一年四月～七月（三カ月）、十月（一カ月）

住まい 木造平屋建 二段ベッド

食事 トウモロコシ主体のパンと雑炊

仕事 馬屋当番、政治部、カジャノフ大尉の当番

衣服 特に不自由はなかった

シラミ 少しいた

伝染病 出なかった

作業の状況 ①収容所の食糧、水等の運搬

②薪割り、食糧の配給受け、他雑

給与 なし

収容人員 二、三百人くらい

宿舍 木造平屋建

労役の時間 八時間

健康管理 特になし

健康管理 特になし

健康管理 特になし

健康管理 特になし

常日頃健康を保つ上で役に立つこと 気力だけ

○第二次収容所 スパーク、昭和二十一年八月

から九月まで二カ月

生活の様子 すごい蚊に毎晩泣かされた

住まい 野原に土を盛り、両方から穴を掘っ

た中で住んだ

食事 パンとスープ主体

仕事 国境警備隊兵舎の雑役

シラミ 少々いた

伝染病 出なかった

作業の状況 兵舎の白壁塗り他雑役、小生は病

気（胸膜炎）で作業場へお茶を運

ぶ程度

給与 なし

労役 病気休養

収容人員 七人

労役の時間 八時間労働

労役に堪えられない者はどうされたか 休養

健康管理 斉藤軍医（薬はソ連軍から）

○第三次収容所 レチホフカ 昭和二十一年十一

月から昭和二十三年二月まで

生活の様子 丸太の掘っ立て小屋で寒さと飢え

の地獄

住まい 透き間だらけの丸太を並べた二段

ベッドで冬は大変寒く、朝起きると

頭髪、眉毛が真っ白になった

食事 一日一回（最初は三回）

仕事 建築材、薪材伐採、駅で貨車積み

衣服 布切れをもらい、自分でズボンを

縫った

シラミ シラミも南京虫もすごくいた

伝染病 出なかった

作業の状況 ノルマ

薪材は一日四立方メートルでその

他はなし

貨車積みなどは時には二日間連続

ということもあった

給与 なし

どういふ労役についたか 伐採、貨車積み

収容人員 千人くらい

冬最低温度 氷点下四三度

労役の時間 八時間

労役に堪えられない者はどうされたか ほとんど亡くなった。一年四カ月程で百十七人亡くなった

健康管理 特になし

常日頃健康を保つ上で役立つこと 気力だけ

○第四次収容所 ナホトカ 昭和二十三年三月から十月まで

仕事 ナホトカ港棧橋工事、収容所炊事

シラミ 少々

伝染病 出なかった

作業の状況 棧橋工事は三交代でノルマはなし

給与 なし

衣服 支給なし

七、抑留者の統制管理

労役につく基準 特に聞いていない

労役免除 特に決まりはなかった

健康管理 全体で数回、健診を受けた

点呼・作業場への出入り 朝晩

着衣・衣服 支給なし

食事の状況 基準通りの量はなかった

洗脳教育 ナホトカで夜とどき

収容所生活全般 収容所により大きな差があった

懲罰 なかった

八、抑留中の生活と極限状態

乗りこえてきた信念 一言で気力、良き虜友に

恵まれた

生死の境、死に直面したときの感想 特になし

九、帰還

ダモイをいつ、どこで聞いたか 昭和二十三年

九月末

集結地 ナホトカ最終収容所

船内生活 食事以外寝ていた

上陸地 舞鶴港

収容期間 昭和二十年八月から二十三年十月ま

で三年二カ月

十、帰国後の生活

国鉄就職、昭和六十一年定年退職

## シベリア抑留記

岐阜県 藤井文一

生年月日 大正十四（一九二五）年七月十七日生

まれ

現住所 岐阜県加茂郡白川町黒川

昭和二十（一九四五）年二月十一日

兵庫県加古川市青ノ原

岐阜、愛知、三重の混成部隊として集

結

同年 二月十八日

博多港より釜山に上陸

朝鮮經由で北満、孫呉に到着

軍隊生活わずか六カ月で終戦を迎える。

八月末にブラゴエシチェンスクを経由して入ソ、チタ周辺の収容所を転々とした。

抑留中の作業は、製材工場、鉄道工事、伐採作業、農業等何でもやった。今思い出しても、よく命があつて帰国できたものだと思う。体力、気力のない者が犠牲になった。こんなところで死んでたまるものかと頑張った。

元気なうちに亡き戦友のお墓参りをしたいと考えていてもなかなかそれが果たせずに申し訳ない。安らかな冥福を祈っている。

二十三年四月、「明優丸」で帰国した。幸い家族にも恵まれ幸福な毎日であり、神に感謝している。